

ちよつとやさぐれた、  
カルデア職員の話

カルデア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人理継続保障機関カルデアに努める、ある職員の英霊との見聞録。  
英霊との対話。

人類最後のマスターに対する思考。

それを記した文書である。

---

それぞれ各話事に後書きを入れます。

投稿主が後書きにはガンガン出てくるので注意。

# 目次

ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話	
# 1	1
「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」 # 1の後書きとちよつとした妄想	8
ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話	
# 2	16
「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」 # 2の後書きとちよつとした妄想	26
ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話	
# 3	32
「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」 # 3の後書きとちよつとした妄想	40
ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話	
# 4	46
「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」 # 4の後書きとちよつとした妄想	55
ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話	
# 5	62



# ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話 #1

吹雪。

ここカルデアの外はずつと変わることなく、一面の銀世界。

自分は電気ストーブのついた部屋で細々と仕事を続けていた。

少し傷のついたテーブルには大学生の時から使っているパソコンに、多言語の辞書、数多の書類。

まるでどこかの作家の汚部屋のように成り下がっていた。

着任当時の、あの綺麗な部屋は夢かのように消え去っていた。

自分こそまで仕事、というものは得意ではない。

ただ、魔術師の家の分家、というだけだった。

親はなにやら自分に期待していたようだが、自分は分家の分際で何を望んでいるのやらと自嘲気味だった。

そこまで高名な家でもない癖に、と。

自分は、あまりにも凡<sup>つまらない人間</sup>人なのであった。

ふと気付いたとき、部屋の扉が開いていた。

大方、自分が閉めたつもりになっていたのである。

これではストーブも意味を成さない。

どうりで寒いはずだと、閉めようと思ったが、食堂に行こうと思いついた。

コーヒーマシンの一つでも飲んで、気を紛らわせよう。

電気ストーブの電源を切り、部屋を出た。

カルデアの利用者は、その数の都合上英霊のほうが多かった。

今もそこそこ遅い時間なのだが、そこかしこに英霊がいた。

「やあエミヤ、コーヒーマシンを一つ頼んでも？」

自分でインスタントを作るのもいいが、エミヤがいるのであれば、彼に頼むのがいい。

彼のコーヒーマシンは、現代に生きていたんじゃないかと疑うほどの美味しさだった。

「ああ、もちろん。……随分遅くまで起きているんだな」

「俺は鈍くさいから。ん、ありがとう」

へらつとした笑みを浮かべてコーヒーマシンの入ったマグカップを受け取る。

どうやら、今日はシヨコラテのようだ。

大方、誰かがチョコレート菓子でも頼んだのだろう。

それからゆつくりと食堂内を見渡した。

その時目に入ったのは、目を伏せ頬杖をついた

——暴君賢王ギルガメッシュだつ

た。

賢王とは、英雄王の晩年の時分を指す。

噂によると酷いホリックワーカーで、藤丸立香の制止がなければ四六時中働いているのだとか。

が、中身は英雄王人類最大のシャイアニズムと変わらないため、職員からすれば気を遣う人なのは変わらな

い。自分は賢王から離れた場所に陣取りコーヒーを飲み始めた。紙片類でも見ていれば、誰も邪魔してこないだろう。

結局自分が腰を上げたのは飲み始めてから一時間が経った頃だった。

エミヤに一言声をかけて、おかわりを手に食堂を出た。

いつの間にか食堂には片手で数えられるほどにしか英霊は居なくなっていた。湯気を立たせながら、部屋路につく。

窓辺の辺りはライトが消灯になっていて、窓から入る月明かり……のような物だけが、廊下を照らしていた。

誰一人、自分以外が居ないこの空間が何故か神秘的だった。

外は未だ吹雪のままだったが、それがより神秘性を高めているような、そんな気がした。

「おい」

——そう思っていたからこそ、声が聞こえた時、飛び上がりそうになった。後ろを怖さ半分に振り替えると、薄暗い中、赤い瞳と目があった。

まるで蛇のように鋭い目、重力に従って真つすぐに下りた金糸の美しい髪。

——声を掛けてきたかそこに立っていたのは、賢王、ギルガメツシユだった。

「なん、ですか」

自分は、あくまでも務めて冷静に答えた。

「貴様は、眠らんのか」

貴方が言うのかと、言いそうになって慌てて言葉を喉の奥に押し込んだ。

彼のような、王様系サーヴァントは機嫌一つ損ねるだけで首が飛ぶ。

自分はまだ、死ぬわけにはいかなかった。

「……まあ、自分、鈍くさいので」

エミヤの時と同じ返答なのに、不思議とトゲトゲしく言っていた。

その返答に、賢王は

「ほう」



とだけ零した。

目は、自分を射抜かんばかりの鋭さのまま。

自分、もう行っていいですか、と口を開こうとした時、賢王はそれを遮って再び問いを口にした。

「貴様は、此処カルデアをなんとする?」

——はい?

と危うく零しそうになった。

カルデア。

人理継続保障機関、フィニス・カルデア。

保障機関とは名ばかりの、アムニスフィアの、天体科の魔術工房。

おそらくは、マリスピリー前所長の根源を目指すための。

時計塔にお世話にならなかつたものの、なまじ魔術を齧っていた自分は、彼がロードであることを知っていた。

時計塔のロードが、ここまで大規模な工房をつくるのは、おおよそ根源に辿り着くためだろう。

——それを、なんとする?

つまり、「どう思うのか」を聞いているのだろうか。

自分は返答しかねた。

嘘をついたところで、賢王にはバレてしまいうし、機嫌を損ねようものなら首が飛ぶ。

賢王はただ返答を待っていた。

自分は、目線を外光に照らされた廊下の床に下げ、こう告げた。

「ここは、地獄だ」

「見も知らぬ、顔も知らぬ、名も知らぬ誰かの為に、一般人が生命イソチをかけねばならない。」

「——地獄だ、地獄以外に当てはまるわけがない」

「もし仮に、此処が地獄でないとするのならば——」

「この世、全てが地獄だった、というだけだ」

——それだけ言うのと、自分は大きく息を吐いた。

冷やされた息は、白い湯気となって、上に上って、消えた。

実を言えば、一般人と言ったのは藤丸立香のことではない。人類最後のマスタ

自分は、のこを、一般人だと思つたことはない。

余りに恐ろしいサーヴァント達と友達になろうとする藤丸立香の、どこが一般人なの人類最後のマスタ

か、自分には理解できなかつた。

魔術を齧っただけの自分のほうが、余程一般人だと思った。

もし、自分が一般人とはいえなくとも、藤丸立香は我々とはベクトルが違う。人類最後のマスター少なくとも、一般人ではない、と自分は思っている。

暫くの間、沈黙が場を支配した。

恐る恐る、顔を上げると、賢王は居なくなっていた。

返答に満足したのか、途中から詰まらなくなったのか。

自分にはわからなかった。

ただ、分かったのは、

シヨコラテが温くなるほどここで相對していた、ということだけだった。

## 「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」#1の後書きとちよつとした妄想

はい、ということ、「ちよいやさぐれカルデア職員」のお話を読んでいただいて有難うございます。

いいねやブックマークを多数頂いて本当にうれしいです。重ねてお礼申し上げます。今回のお話は、主人公を「中途半端ではあるけれど、魔術知識のある職員」にしてみました。

いろいろピックアップのほうでお話をROM専が如く読み漁っているのですが、みかける数では本編のダストンのような、

元々一般人あがりの職員のお話が多くみられたので、こういった主人公になりました。

今ではそうじゃないかもしれませんが、まあなんとなくイメージです。

ちなみに、シルビア程の魔術協会組にできなかったのは、シルビアのような考え方の魔術師協会の職員って、まあめつたにいないだろうっていう推察と、あとはカルデアを地獄であると主人公に言わせるためでした。

だって、魔術師からしたら人理は燃えましたが、カルデアって垂涎の品ですよ。地獄だなんて考えに至らないと思うんです。

さて賢王は何を思って魔術師もどきの主人公に声をかけたのか。はつきりいつて想定していません。

でも良くも悪くも、カルデアという組織を「王」というか、リーダー的視点でみるのつて彼みたいなたいぷだと思っうんです。

自分のマスターに害になりそうなの、特にマスターと似たような環境の人間がいたら、接触を凶りそうだな、と。

主人公はマスターに対して懐疑的な思考はしていましたが、魔術協会に売るほど嫌悪的ではない。

ある意味、興味が湧きかけたって感じでしょうか。

でもマスターのほうがおもしろいから、敵対したらマスターに着くと思っいます。さすがにね？

さて、残りちよつとした妄想をば。

七つの人類悪に、主人公は入るのか否か。

七つ目がカルデア関連なのは、ほぼ確定なんじゃないかと言われていますが、人類悪って単独権限で時間関係の

攻撃って無効化されるんですよ。

だからCCCイベで（投稿主は未参加のイベ）キアラに殺された主人公は、メルトの時間遡行によって復活したため、

当てはまらないだろうとする考えが多いです。

すると必然的に、カルデアに取り込まれた彼女がそうなんじゃないか？と考えられませんが、私はすこし考えが違います。

なんというか、もともとEXTRA民だった私にとって、SERAPHは常に並行世界であるという認識が強いんですよ。

常に多重屈折的というか、数多の可能性が重なり合い続けているというか。

一度殺された主人公は、本当にプレイヤーのぐだなのか？みたいな妄想がグラグラしてるんですよ。

それか、殺されたのは真実だけど、SERAPHという場所で死んだから、みたいな理由なのか。

SERAPHって本来、肉体は侵入する際死んでないんですよ。

魂が死ぬから、結果的に死んでいる、と判断されるだけで。

まだ主人公って、肉体は、死んでませんよね？っていう屁理屈がまだ残ってるな、と。コフィンも元々死を誤魔化せるものですし。

だからこの屁理屈が木っ端みじんになるまでは、ぐだⅡ人類悪のⅦ説はまだ通るんじゃないかと。

そもそも、最初のほうで「設置」されたっていうのが盛大に不穩。

人類悪も、各時代に「設置」されたものである、と言っていた考察者がいましたが、

じゃあ同じく「設置」されたぐだは？という疑問も残ります。

契約自体はギヤラハッドが繋いでくれたものですが、本人同士の相互理解って、彼が居てもいなくても、

難しいと思うんです。

スパさんなんか、特にそうだと思うんですよ。

圧制者は敵、つまり自身に令呪を使えるマスターは……ってなる場合もありえるんですから。

そんな彼であっても、犯罪界のナポレオンであろうと、神霊であろうと。

主人公に害悪な感情を痛烈に吐露する英霊って、居ないじゃないですか。

これは召喚陣に昔のマスターを重ねさせる術式を組み込んである、という考察もあるんですが、

それだとギヤラハッドは？ってなりませんか。

ギアラハッドが召喚されるなんて言うのはレクイエム世界とFGO世界だけですよね。

最悪、マシユが死ぬ可能性もあつたわけで（特にオルタだとそうなることも視野に入ると思うんですが）。

死なせないために残ったのですが、それでも憤りを感じていたわけです。

そんな中、彼女の手をにぎって、看取ろうとした主人公をみて力を引き渡す。

この場合、中にいるギアラハッドは主人公をすぐに信用できるんでしょうか？

良くも悪くもカルデアのマスターである主人公が、一般人（例の実験をする連中じゃない）だなんてすぐに判断する。

それって根拠なしに可能なんでしょうか。

マスター前例がないギアラハッドが信用できる。

それも、ある意味「獣」としての力が関わっていると置き換えても問題はないわけですね。

まあ根拠が乏しすぎる上にマシユの発言のほとんど否定するはめになるので本推しにはできませんね。

ゲーティアはある意味主人公を追い詰め続けた「人類悪」の中で特別だと思えます。

彼は唯一、「功績によって」獣になったわけですが、逆にいえば、「功績さえなければ」



ただの術式どまりなのです。

その功績が、唯一の人理焼却をなしえた世界線が、主人公の存在一つで無に記したわけですから。

ある意味、主人公にとっても特別なのではないか、と考えられますよね。

ビーストⅠの特別って、相当ヤバイ存在だと思っんです。

そんな主人公が、普通な人間って、ありえないなあと漠然と思ってしまいませんか？  
私はそう思いました。

終章はめちやくちや急いでクリアしてたんで（大奥イベ中のこと）、飛ばしてしまっただけの部分も多いんですが。

でも何度も変身して主人公を何度も足止めしてきたのって、彼だけだと思っんですよ。

キアラはメルトにトドメさされますし、カーマは爪が甘すぎますし、フォウ君戦ってないし。

ビーストⅡのティアマトの場合は、足止めとは違うと思っんです。あれ、主人公側が足止めしなきゃいけないので。

そういう意味でも、ゲーティアの執着、つまり特別なんですよ。

ちよっと何言ってるのか分からなくなっただけで話を変えましょう。

そうそう、今回の「ちょっとやさぐれた、カルデア職員の話」の主人公に言わせたかったのは、

「カルデアとは地獄である」っていうことなんです。

いわずもがな、「一般人にとって」ということなんです但最终頁にもあつた通り、

この話における、主人公にとっての一般人というのは自分です。

どうあつても、魔術師的にも一般的にも、未恐ろしい英霊と友人のような親しさのある藤丸立香は

一般人ではありません。

ただ、自分よりも一般的的思考である、という認識です。

誰であれ、力を出し合う仲間とは仲良くしたいですが、英霊って仲間……仲間？みたな立ち位置じゃないですか。

彼らは死者だし、価値観違うし、そもそも世界も違う。

気に食わなければ殺す、という輩も居ないわけじゃない。（笑い声が喧しい人たちとか）

そんな、ある意味全員が怪物のような（生者の人間からしたら）存在と友人的な思考をしあうって、

「一般人」じゃありえないですよね。

なので、個人的にはダ・ヴィンチちゃんという、主人公は普通。っていう本編内容に、クエスチョンがでたのですよ。

それを今回は主人公（カルデア職員）にいつてもらったわけです。

ロストベルトは第五章まででしたが、ぐだ本人の不穏さは一切拭かれていない。

最悪、デイヴィットのロストベルトで並行世界のぐだ（ビーストⅦ）ができて、本世界のぐだがビースト覚醒する。

なんてことがあり得るのかな、と思ったり。

マシユも本格的に英霊になりつつある今、主人公だけが普遍的って絶対免れないと思うんですよ。

また再び選択を強いられる場面が必ず来ると踏んでいます。

良くも悪くも、英霊に近しくなっていくは、家には帰れないんですが、

何処に還るんでしょうね？

それでは今回はここまで。

次のお話は、藤丸立香を英雄視するということ人類最後のマスターについてです。

各話ごとに後書きを書くつもりです。それでは！

## ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話 # 2

第六特異点、エルサレム——否、キャメロツト。

そこは本来、宗教に関する戦争があるはずの聖地エルサレムだった

だが、藤丸立香人類最後のマスタが降り立った場所は、もはや聖地エルサレムではなかった。

「キャメロツト聖都」だった——。

ムスリム達は多くが死に絶え、生き残った者はハサン・サツバーハラ「山の民」に匿われていた。

挙句、エルサレムとは違う土地であるはずのエジプト領まで出現している始末である。

そんな、恐ろしい、悍ましいとも云える魔境人類最後のマスタを藤丸立香を乗り越えた。

否、乗り越えてしまった。

この事を受けて、皆は喜んだ。

残る特異点は、一つになったのだから。

——自分は、というと。

素直に喜ぶ気持ちにはなれなかった。

これでまた一つ、藤丸立香は一般人から離れていくのだから。

自分は、藤丸立香と会話することはほとんどない。

好きでもなければ嫌いでもない。

——ただ漠然と、彼に対する親近感と、畏怖とが心にあつた。

だからこそ、喜ぶことができなかつた。

一般人から離れていく、ということは彼にとつてどういう意味を持つのか。

今まで乗り越えてきた特異点。

オルレアン、セブテム、オケアノス、ロンドン、北アメリカ大陸。

それらが修復されるたびに、自分はそんなことを考えていた。

そのため、他の職員が藤丸立香の勝利を祝つたりする行為に、付き合えなかつた。

自分は、藤丸立香を一般人だとは思っていない。

「藤丸立香、という人物は一般人ではないが、ある一般性を以て英雄と縁を結ぶこと

の出来る人間」だと思つている。

——つまり、一般性があるから縁を結べている、と考へている。

その一般性というのは、誰かと友達に、親しくなりたいという所だ。

が、その対象に英霊までもが入ってしまうのが、藤丸立香の一般人でない所以であ

る。

彼らはすでに死人だ。

そして彼らには彼らの世界価値観がある。

余りにも違い過ぎる彼らと、友人になろうとする……と言うのは語弊があるだろうか。

仲間というのは勿論のことだが、友人の様に思っているフシにはある。

そこが、一般人我々と違う所である。

さて、自分は今、廊下を歩いている。

賢王の時とは違い、煌々と廊下を照らす電燈が幾つも並び起動していた。

自分は第六特異点修復祝いに参加する気が起きず、こうして一人、廊下を歩いて部屋路についてる。

外は未だ、吹雪だった。

「おい」

そんな事を考えていたからなのか、とても幼いその容姿から、想像出来ぬ程の低い声に一瞬反応出来なかった。

「あ、はい、なんですか、——ええと、アンデルセン、さん」

——ハンス・C・アンデルセン。

劇団員や脚本家を目指す半ばで折れ、詩や童話を生きる道とした男性。

生前は酷いコンプレックス持ちで、初恋すら実らず、その手紙を持って亡くなったとされる。

世界三大童話の一つを担い、唯一オリジナルを生み出し続けた人物だ。

——そんな人物がここカルデアではまこと幼い姿なのはこの際置いておくとして。

「貴様、今暇だな？」

「……ええ、はい、まあ」

だから寝かせてください。

とは、言えなかった。

言ったところで彼は聞かないし、そこら辺の一線を見極める事は出来るだろう。

「よし、なら書齋にコーヒーを二つ持って来てくれ」

「エドモン・ダンテス氏は？」

「バカめ、彼奴はマスターの傍に居るタイプだろうが」

——つまるところ、エドモン・ダンテスの代わりにコーヒーを淹れろ、と。

「その書齋でいいんですよね」

「ああ、頼んだぞ」

それだけ言うと、アンデルセンは書齋の中に消えていった。

まったくもって、勝手な人である。

こういつたことは、何も珍しいことではない。

エミヤ達英霊のほうがむしろこういつたことをしてくれ、というだけで。とはいえ、彼らの好みは推し量れないので角砂糖やミルクも盆に乗せる。

ちよつとしたお茶請けも添えて。

アンデルセンの所——書齋は元々今は亡き職員のものだったが、

今ではもっぱら作家系サーヴァント達の溜り場になっていた。

そのことに職員の反発もあるが、自分はそうは思わなかった。

コチラが助力を願っているのだし寧ろそれだけで済むのだから良いほうだろう。

重い扉が開き、中に入った。

仲は恐ろしい程真つ暗で、視力が秒で落ちそうな程だった。

「おお、出来ましたかな？吾輩、待ちかねていましたぞー！」

やはり、というべきか部屋にはシェイクスピアも居た。

山のような羊皮紙に原稿用紙を見たところ、今まで彼らと乱闘をしていたらしく、

シェイクスピアは大きな伸びをした。

ウイリアム・シェイクスピア。

英国が誇る随一の劇作家。

四大悲劇は勿論のこと、ロミオとジュリエットなど、有名な作品群を世に送り出した



偉人。

——それが、サーヴァントになってもこんな場所でカンヅメしているなんて。ファンが知れば卒倒することだろう。

自分はそんな事毛ほども思わないが。

「好みが分からなかったから、色々持ってきましたが」

「構わん、そこにおけ。——おい、お前はそこに座れ」

置いたらすぐにも帰ろうと思ったのだが、コレである。

アンデルセンにバレてしまった。

というか、何故引き止めるのだろうか。自分を。

「茶請け付とか、吾輩、感動モノですなー」

「なんだ、貴様日本生まれか？妙に気が利くな」

「ナチュラルな偏見どうも。——日本にいたこともあるけど」

「そうか」

「……ええ」

聞くだけ聞いてコレである。

彼らが休憩中、手持無沙汰だった自分は、適当な本を開いて読み始めた。

ちようど、本の一章分を読み終えたところだろうか。

お茶請けを食べ終わったアンデルセンが口を開いた。

「そういえば、この間。貴様キャスターの方の英雄王に噛みついてたらしいな？」

「……ただ聞かれたことを答えただけです」

「ここを地獄といったらしいが？」

「我々にとつては地獄ですな！ 主に原稿<sup>レ</sup>的な意味で」

「……まあここが地獄なのは間違いない。——特に、藤丸立香<sup>マスター</sup>にはな」

「そうですね、まあ吾輩、楽しければ何でもいいのですが」

「それは貴方だけでしようが……」

自由気ままな劇作家<sup>シエイクスピア</sup>に、自分は酷く呆れた。

サーヴァントは皆そうだが、シエイクスピアは特段そうだろう。

「お前にとつて彼奴<sup>マスター</sup>は何だ？」

「何、つて」

「確かに、カルデアの職員の方がマスターについてどう思っているのかは気になりますな」

コーヒーを飲みながら、イヤに笑顔になってシエイクスピアは言った。

大方、ネタにでもするつもりなのだろう。

「……少なくとも、<sup>人類最後のマスター</sup>藤丸立香が特異点を修復するたびに、

ああやって、もてはやすのは不適切だとは思ってる」  
 「ほう？どういった見だ？」

興味が湧いたのか、アンデルセンはカップを盆に置いた。

自分に視線を投げられるのは嫌な気分だが、自分は少しづつ考えを述べ始めた。

人類最後のマスター  
 「藤丸立香を一般人だと、此処において思ったことはない」

「一般人としても、魔術師としても、異常——異端者だろう」

「だが、本来その力は生者——彼と共に生きる者に向けられるはずだった。

こんな状況だからサーヴァントに向かつてしまっているだけだ」

「力、というのはなんだ？」

「なんといいのか、君等と親しくできる、ところかな」  
サーヴァント

ふむ、というだけで、アンデルセンは何も言わなかった。

「どうぞ、続けてください」

逆に、シエイクスピアが続きを催促する。

「もう一度言うが、藤丸立香はもう一般人じゃない。だけど——」

彼が一般人であったことを忘れるのは最もしてはいけない、とも思う」

「あんな風に——特異点を修復するたびに藤丸立香を英雄の様に扱うべきじゃない。  
人類最後のマスター

ドクターロマンや、ダ・ヴィンチ、マシユなんかは気にしているんだろうけど、他は

そうは見えない」

「藤丸立香は——一般人として生きるべきだった」

「だけど、もう戻れない。ならせめて、カルデア此処だけでも、彼をそう扱う——

この表現はダメだな。そう対応すべきだ」

そうでなければ、藤丸立香が壊れてしまう——

そう思いはしたが、口にはしなかつた。

本当にそうなってしまう気がした。

「それが、貴様の考えか。——では、それに対する俺の見解を述べよう」

一通り聞き終わったアンデルセンは、コーヒーを一口、口に含みながら、そういった。

自分を見据え、ひと呼吸おいて。

「貴様のそれは間違いだろ」

「すくなくとも彼奴を<sup>マスター</sup>英雄視するべきではない、というのは同意できる」

「最近ハロウィンだか天竺だかくだらん特異点すら修復するのが当たり前になつてい  
る。いや、なつてしまつてい

「だからこそ、職員も慣れてしまつてい。俺たちは既に<sup>アイデンティティ</sup>“生き方”が決まつてい

からな。

弊害はない。だが貴様らは自由に生きることができ。その分適応力というモノに

振り回されやすい」

「その点、貴様は物事を俯瞰的にみることが出来るんだらうな」

つらつらと語るアンデルセンに自分は目が点になった。

流石は人間観察Aというべきか、彼は周囲の人間をよく見ている。

彼はそのまま、こう続けた。

「そういつた考えを持てる人間は彼奴にとつても貴重だらう」

出来るなら、忘れてやらないでやってくれ。

そしてアンデルセンは目を伏せた。

「いやあ、ごちそうになりました」

いつの間にか、お茶請けもコーヒーも茶渋……コーヒー渋?を残し、空になっていた。

「どうして中々、悪くはない。どうだ、ここに習慣的に来ないか?」

「暇があれば」

「ほう、ならば今!片手間に貴方の来歴でも教えていただきたい!」

「……はあ」

「それはいい。どうせ暇だらう。ネタになるかもわからん、話せ」

自分は面倒くさくなって本で顔を覆って、瞼を下ろし、彼らの質問に無視を決め込む

ことにした。

## 「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」 #2の後書き とちよつとした妄想

はい、何時も読んでいただいて有難う御座います！

今回もつらつらと語らせていただきます！

今回主人公に言わせたかったのは、「藤丸立香を英雄にすること」です。

新宿のシナリオにて、職員さんは彼／彼女を気遣い、功績はドクターのものにするこ  
とで、守ろうとしてましたね。

そこからヒントを得ています。

少なくとも、特異点修復中はお祝いがあったのは確かだと思います。

良くも悪くも、人間ってそういうの好きですからね、自分も好きです。

特に第六特異点は、PLAYERとしても難易度爆上がりで、ガウエインで絶叫した  
方も多いのではないでしょうか。

そういう意味で、乗り越えた時は御祝いをしたと思うんですよ。

でも、それって、藤丸立香にとって「プレッシャー」になりますよね。

期待の反対はプレッシャーみたいなどころあるじゃないですか。

とつてもしんどいと思うんです。もともと一般人あがりの数合わせだから。

職員にそういう気持ちはなくても、主人公……藤丸立香にとつてはそうなることも考えられる訳です。

だつて生きたいから、してるのに出来て当然みたいになつてくるわけですよじわじわと。

しんどすぎませんか？ということで、そんな事を考えてくれる職員を描いてみました。

もちろん、気を使つてくれる職員さんはいるとは思うんですが、具体的に本編やらイベントには出てない気がするんです。

彼／彼女を明確に一般人だ！つていつたのは本編一部の大きいダ・ヴィンチちゃんぐらいだと思うんです。

なのでこうなりました。なんて雑ウ！なんででしょうか。

さて、今回の妄想をば。

前回はSERAPHだから、肉体死んでなくね？獣いけるくね？とかいう場違いすぎる妄想を垂れ流したわけですが。

なので、今までの獣に肉体は必ず必要なのか？を考えます。ついでに精神がなくてもいけるのか？というのも。

まず、ピーストI「ゲーティア」。

彼はもともと人理補正式であるため、肉体はソロモンの遺体を使用していました。

最終的に獣、として顕現する際にはその肉体を捨てています。

これ、肉体だけじゃなくて、「思い」——つまり精神体だけでも獣になれる根拠ではないでしょうか。

ビーストⅡ「ティアマト」。

これは分かりやすいですね。彼女は本編で「攻撃したくない」と頭脳体を自ら拘束していたのに子らに殺されましたが、

結果的に神の御体をもって獣として蹂躪しました。

つまり、知能やら精神は死んでいてもOKなわけです。

一度そう「思つて」行動したら体にしみつく——というのは考えすぎでしょうか。

ビーストⅢ／R「殺生院キアラ」。

彼女の場合は自ら肉体をすてて電脳科してますよねこれ。

え？ですよね。

これ精神体だけでも獣になれるってこと示してませんか？もともと月のキアラ（肉体無）と同機したわけですし。

そういうことだと思ふんですけど……うーん。

ビーストⅢ／L「カーマ／マール」。



彼女を語る際に重要なのは、シヴァに体を第三の目で焼かれたから宇宙でもある、という点だと思います。

重要なのは、「宇宙⇨カーマ／マーラの体」のではなく「カーマ／マーラ⇨宇宙」という点です。

あくまでも、宇宙とカーマ／マーラは同一なのであって、宇宙がカーマ／マーラの体というわけではない、と考えてます。

え？ 宝具演出？ 大量のカーマ／マーラ？ ははは、なんのことやら。

あれって、宇宙と同質だから体の中に宇宙があるってことでは？

でもそれだと、あの大量のカーマ／マーラに説明がつかないんですよねー。

宇宙と同質だから、宇宙がカーマ／マーラに見えるということだけでひとつ……。

ビーストⅣ「キヤスパリーグ」。

彼も分かりやすいかな、「[r b : 中身] > 精神」をすてても顕現できてます。

でも中身がないと彼の場合獣になれない気もするんですよね。

でもでも、あれってあくまで敵対してるから比較で強くなるんですよね……？

うーん、参考になるのが前半3名だけです……。

正しくは裏付けになりそうなのが、ですけれども。

別に主人公に獣を押し付けたいわけじゃないんですけど……。

クリフトオトビースト考察に基づく、たしかVIIって無神論ですよ。

それができるのは、現代に生きてて異聞帯滅ぼしてる主人公くらいのものじゃないかと思うんです。

なんででしょうね、当てはまるのが彼／彼女かオルガ（イツカ）くらいですから。

なんとなく、所長は不穩なんですけど、あの異聞の巫女じゃないか？ っていう直感が残ってて…。

じゃないと、アニメだったか、マシユに手を伸ばす必要性がない気がします。

あくまでマシユ・キリエライトに入れ込んでいたのはビーストIならぬフラウロス。ほかのビーストはマシユガン無視なんですよ。

その点、あの異聞の巫女ちゃんはマシユを助けたり、マシユに手をのばしたり…

あれこそ、ちゃんとマシユと向き合おうとしたオルガマリーなんじゃないかな、と。

あとオルガマリーは、滅ぼしてないんですよ。

滅ぼしていつてるのは主人公なのであって、彼女は似たような事はしようとしてましたけど、その前に死に続ける状況に追い込まれますよね。

なのでオルガマリービースト説はどうか、と。

あくまでカルデアスは世界を滅ぼす兵器ではありませんし。

ぜひここらへんの考察を教えてください。ええぜひ。

後は、そうですね。

アンデルセンをマスター・鼻頂というか優しい感じにしたのは、彼をお人よしというかなんだかんだ人間好きだと思ってるんですよ。

良くも悪くもマスターを導く人間だと思ってるのであなりました。

あとシエイクスピア書きにくすぎませんか。面倒すぎる。

アポの先生もいつてましたね、なんでこんなキャラクターにしたのか。

あとあと、アニメ放映おめでとうございます！

2話に関してはもう雨やら台風で大惨事だったので綺麗に見れないかなとかおもってただけありがたいとうB〇11！

めちやくちや綺麗でうれしい。すき。

キヤメロットも映画化順調ですよね。本当に愉しみです。

あと獅子王がどこから来たのかも描かれるといいですね！1時間越えの映画なので、ぜひ考察のヒントが欲しい所です。

最後に、ネタ切れなのでコメントにぜひリクエストください……。

〇〇について語ってほしいとか、〇〇のイベントについてとか。ぜひぜひ下さい！

## ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話 # 3

カルデアの施設は多岐に渡る。

自分にとってはもはや見慣れた景色だが、外は凄まじい吹雪である。

それ故に、必然とも云えるだろう。

例えば、大浴場。

職員や英霊を含むカルデアに滞在する人々が利用出来る大きな風呂。

もっぱらローマ出身者や日本出身者が利用する。

例えば、地下図書館。

紫式部が司書を務める図書館で多くの英霊、職員が利用する。

マスターである藤丸立香も新たな英霊が召喚されるたびに籠っているようだ。

例えば———そう、自分が居るこの温室もそうだ。

花も咲くこの温室は、元来食料確保のためのものだった。

ある職員によって種が蒔かれたのを期に、一区画だけ花壇になっている。

自分がカルデアに来た時に既に咲いていたが。

この区画に居れば、話しかけられることはほぼない。

口下手な自分にとつては、部屋以外で唯一気が休まる場所だった。そう「だった」のだ――。

「やあ」

このウーパールーパーみたいな魔術師（英霊によつてはグランドロクデナシ）が現れるまでは。

このウーパールーパーもどきは、『アーサー王伝説』に登場する宮廷魔術師である。人と妖魔の混血で、人格こそあれど感情はない。

その上湖の精霊を誑かし、果ての塔に幽閉されている。

人理焼却といった事態でなければ召喚もできないとは本人談である。

「おーい職員君？」

「……」

「無視はよくないぞう！」

「……なんなんですか、御用は」

「御用？ 御用はないともさー！」

このキャスターは何故どや顔なのだろうか。

ここ最近、ずっとキャスターに付きまとわれている気がする。

そう思い、自分は

「そうですかさようなら」

とその場を離れようとした、が。

「わーっまってまって！ね、話だけでいいから！」

「御用はないんでしようが」

「まあまあすわって！」

流石に筋力Bにはかなわず、自分はここに長居するはめになった。

「こんな風に表情をコロコロさせるが、感情というものはないらしい。」

「ふふん」

「何をそんな上機嫌なんです？」

「だってウワサの職員君と話せるんだよ？喜ばないわけじゃないじゃないか」

「ウワサ」？

（自分が？何故？）

「あはは、なんでって顔してるね。ほら王サマ——賢王ギルガメッシュに嘯みつい

ただらう？」

「誤報です。ただ問いに答えただけです」

「あの言い方じゃあ嘯みつくでも間違いないと思うなあ」

「……まさか」

「そのまさかさー！」

「……はあ」

マーリンこの男は本当に質が悪い。

賢王との対話を千里眼現在視で見っていたのだ。

「プライベートとかわからないんですかね？」

「なんだいそれ」

「これだから魔術師は……」

「嫌だつて王サマが職員————職員にちよつかいかけにいくんだよ？面白いに決

まっているじゃないか」

これだからウーパールーパーグラントクソ野郎なのである。

「あの問答を、アンデルセンさん達が知っていたのは————」

「ああ、僕の仕業せいさ」

マーリンはのんびりと答えた。

つまるところ、自分があのキャスター二人に絡まれ、この男にも絡まれているのはあの問答のせいだったのだ。

「あの事を知っているのは誰です？」

「キャスタークラスは皆大体知つてると思うな。別クラスが知るのも時間の問題さ」

「なんと……」

「だって面白そうだからさ」

「そんなんだから職員に反発する人が出るんですよ」

昔ほど酷くはないが、それでも未だに反発する人は少なくはない。

これは現在のカルデアの重大な問題のひとつだろう。

マーリンは笑うだけで、何も答えなかった。

「あずかり知らぬ、と言いたいのだろうか——。」

「ああそうそう、藤丸立香の事だけど」

「藤丸立香がどうかしましたか」

「マスターに対しては、そのままであってほしい。先達として、人生の心配として、ね」

「珍しい、貴方にとって大切なのはアーサー王だけだと思っていました」

「そりゃあ、アルトリアは大事さ。でもマイロードだって大切なんだよ」

「マスターは、夢の中ですら休みがないから、ね」

「マーリンは遠い明後日を見て言った。」

「夢の中ですら……」

「そう。例えば狂王を暗殺しそこねて散った英霊達・“聖罰”によって虐殺されたムス

リム達」



「聖なる槍で散った英霊、村人たち——特異点で死んだ人々に対する後悔。そんな辛い“味”ばかりだ」

マリリン  
彼は夢魔だ。

マスタ  
藤丸立香のサーヴァントとして、いくつもの夢を喰べたのだろう。

「辛い味、ですか」

「ああ、むしろ幸せな味を喰べたのは片手で数える程さ。きつと、もつと救えたはずだつて、そう思ってるんだよ」

「そうですか、ですが——それは傲慢です。藤丸立香の傲慢さが見せる夢ですよ」

「………という」と

「単純です。今でこそ、多数の英霊——無論貴方も含めますが——がいます。きつ

と、マスタ  
藤丸は

「これだけいるのだからと」

「思っているのでしょうか。ええ、ですが、救えないものは救えない」

「例えば、特異点Fへの強制レイシフト前の管制塔爆破。これによつて出た死傷者をここにいる英霊で全て救えますか」

「………それは」

「そういうことです。例え抑えられたとしても藤丸は救えたはずと言うでしょう。……」

これを傲慢といわずしてなんというのですか」

「君はやっぱり、変わってるよ」

キヨトンとこちらを見ていたマーリンが笑みを浮かべて言った。

「どこがです」

「マスターマイロードの味方なのに斜に構えているところ」

「だからどこがです」

「さっきのところとか特にそうさ。うんうん、そういう人キャラクター物も、マスターマイロードには必要さ」

まるで、おもちゃを見つけたかの様に笑うマーリンに、自分は引いていた。

「よーし次は、そうだな、君について教えておくれ」

「イヤですよ」

「え、どうして。私と君の仲じゃないか」

「ただだか30分ですよね?」

何を言っているのだろうこの夢魔は、と思っていると

「おーい、ちよつと……げえマーリン!?!」

「やあロマニ・アーキマン」

「ちよつと!職員に手を出してないよね!?!」

「もちろん、どっちかかっていうとおも」

「ちよつと!?!君大丈夫!?!」

「は、はは……」

自分は、苦笑いを浮かべる他、なかつたのだった……。

## 「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」 #3の後書きとちよつとした妄想

今回のお話は人間性と感情皆無の夢魔マーリンと、主人公に懐疑的な職員との対話でした。

ウーパールーパーやらグランドロクデナシやら雑言ばかり使用して申し訳ありません。この場を借りてお詫びします。

今回言いたかったことは、彼<sup>藤丸立香</sup>／彼女の傲慢性でした。

良くも悪くも人を救いなれている彼<sup>藤丸立香</sup>／彼女が救った後に思うのは、

救えた人々に対する喜びではなく、救えなかった人々に対する悼み、後悔です。

死者を悼むことは、ヒトにとって当たり前ですが、彼<sup>藤丸立香</sup>／彼女はあまりにも、

救えたということに対して無機質だと思うのです。

さも、「救えるのは当たり前」とでもいうように。

ソーシャルゲームという媒体のため、主人公である彼<sup>藤丸立香</sup>／彼女の作成コンセプトは

「一般性」と「普遍性」でした。

某菌糸類曰く、「実はこんなのでした、というのではない」そうなので、おおよそ間違い

ではないと思います。

この点において、そのコンセプトから彼藤丸立香／彼女は離れているように思えたため、あの様な作品になりました。

さて、皆さんがお待ちかねかどうかは分かりませんが、ざっくり考察タイムです。

今回のネタは前回からの続き、ということ、

「オルガマリーは異聞からの巫女か、ビーストⅦか」です。

2部1章をクリアした方々は、空想樹を取り除いたあの子を覚えていらっしやるでしょう。

今回はあの子Ⅱオルガマリー説と、オルガマリーⅡビーストⅦ説を比較していこうと思います。

根拠①ビーストⅠに、カルデアスにぶち込まれた

根拠②オルガマリーは自己顕示欲が非常に強い

根拠③ビーストⅠ、フラウロスの台詞より「カルデアスの中で死に続ける……」

この説はオルガマリーこそがビーストⅦである、というモノ。

根拠の①は、ギルガメッシュの「Ⅰが居るのならⅦももう居る」(要約)というのを元にしたものです。

Ⅰのフラウロスによって、オルガマリーがⅦになったとするなら、この発言と合致し

ます。

根拠の②は、これは「自己愛」という名の人類人類愛悪なのではないか、というもの。人間の善性と悪性の粋を集めた部分なのでらしく感じますね。

根拠の③は、死に続けるということは生き続ける事と同義であるとして、単独顕現の力の一端だと推察したもの。

この根拠を元に考察をしてる方もいますね。

では、反論を考えてみましょう。

①については、彼女が取り込まれたのは観測モデルのカルデアスであるため、滅ぼすような事は出来ないのでは？

②については、自己愛という観点において、殺生院キアラという前例者がいるため厳しいのでは？

③については、彼女が死を感じる時間が長いだけで現実では一瞬であった可能性がある。レフの台詞も比喩では？

どうでしょう、どちらもらしい、といえづらいので悩ましいですね。

根拠①アニメ「ロストルーム」でのオルガマリーに伸びる複数の手

根拠②2部におけるキリシユタリアの語り掛け

根拠③ 「r b : 彼／彼女＞藤丸立香」を助けるような動き、また諦めかけた際の侮蔑的な感情

この説は先述した通り、オルガマリーが巫女なのではないかという説になります。

根拠の①は、E検体という異聞の巫女にあたると思われるモノへの人体実験ではないか、という考察。

本編において巫女がオルガマリーであるとは認められていない頃のアニメであったため、オルガマリー（正体）を

使ってE検体を表現したのではないでしうか。

根拠の②は、オリュンポスでの定例会議におけるキシユタリアの語り掛けについて。

「机上の空論だというマリスピリーの理論を完成させる。見ているがいい……」という部分などが含まれます。

根拠の③は、2部1章と5章での動きについて。

彼<sup>藤丸立香</sup>／彼女らに落胆するのも、助けるのも巫女——異聞帯側であるのなら必要ないハズ。

元になった人間、ないし人格がありそれがオルガマリーではないかという考察です。恒例的に反論を考えましょう。

①については、これは刻印に関する表現でE検体とは関係ないともとれる。作り上げた本人以外には血族であっても毒になる刻印。そのメンテナンスともとれなくはない。

②については、これは独り言としてもとらえられる表現なので良い切りはできない。ただし、5章アトランティスの発言のみを切り取るのであれば語り掛けと切り切りはできる。

③については、未だ明確に彼女の立ち位置が明かされていない以上どうとでも取れる。

1章の空想樹切り取りについてはともかく、5章の侮蔑については敵対しているとも普通にとれるだろう。

さて、筆者がどちらか寄りの結論をもっているかと聞かれれば後者です。

前々からあとがたりで言っているように、ピーストVIIは彼藤丸立香／彼女藤丸立香もしくは並行世界の彼藤丸立香／彼女藤丸立香だと考えているからです。

ぜひ皆さんの意見もコメント欄でお聞かせ願います！反論も肯定意見もじゃんじゃんください！

長々と書いてきましたが、今後彼藤丸立香／彼女藤丸立香は根源を目指していくのでしょうか。

戻る保証もない汎人類史、「カルデアの者」の忠告、武蔵守の先のない未来……。



できれば筆者は彼<sup>藤丸立香</sup>／彼女には平穩な高校生に戻ってほしいと思っているので、彼らの旅路に喜びと幸がもたらされることを願っています。次回ハツイッターで公開していたネタを消費していきます。

## ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話 # 4

カルデアの食堂を営むおは料理に關係するサーヴァント——という訳ではない。  
い。

それらしい逸話はなくとも、それをするサーヴァントは多い。

例えばタマモキヤットがいい例だろう。

彼女はキャスター・玉藻の前の分身、1側面で、日本的に言えば分け御魂といえるだろう。

そも、玉藻の前はかなり身分の高い人物——らしい。

らしい、というのは余り自分について詳しく無いためである。

と、言うよりも彼女について知る職員は居ないような気がする。

日本のサーヴァントが半数を占めるのに、カルデアの職員の日本人は藤丸立香<sup>マスタ</sup>くらいのものだろう。

もしかしたら、他にも居るのかも知れないが、自分には預かり知らぬことだった。

玉藻の前の話に戻るが、身分の高い女性はどこの国も家事というものをしないし、知らないものだ。

すくなくとも、彼女の生きた時代はそうだったらしい。

そんな彼女に料理の逸話があるはずもない。

ということは当然、分霊であるタマモキヤットにも無いわけである。

———そも、あの手でどう料理をするのか、とか、毛は入らないのか、とか考えてはいけない、様な気がする。

そんな事があればクリミアの天使が飛んでくることだろう。

今の所、そんな事例はないが。

自分は普段部屋で、たった一人カッププラーメンをすすする事が多い。

あまり他人と食事をする事を好まないからだ。

最近はどこぞのロクデナスターのせいで、より外に出にくくなっていた。

だが、そうはいかなくなる時もある。

「……あー、やってしまったな」

自分の目の前には、空っぽの排水管しかない下棚があった。

本来ならカップ麺やカンパンといった簡易的食料があるのだが、先日消費したのをすっかり忘れていた。

取りにいけばいいとは思ったが、今日は会議があった。

食事は手早く済ませなければならなかった。

倉庫までは距離がある上に、認証ロックやらがかかっているで面倒だった。

致し方なく、自分は食堂に行くことにした。

「……む、君か。珍しい事もあるものだ」

「今日は事情があつてね」

「いつになればここで食事を取るようになるのかね？」

「ははは、また来世。——誰かと食事することが苦手なもので」

「エミヤに小言をいわれていると、厨房の奥から赤髪の女性——ブーディカが現れた。」

ローマ帝国に踏み荒らされ、手折られた、古きブリテンの花。

イギリスの勝利の女王、それが彼女だ。

「それなら、カウンターはどう？端の方とか」

「仕事をしながらなので、お邪魔でしょう」

「もう、根を詰めすぎるなんて駄目なんだからね」

「……ええ、そうですね」

それが出来たら、どれ程よかったか、とは口に出さなかった。

彼女は善意で言ってくれていたのだから、嫌味をいうべきでないのは分かっていた。

「軽いものを用意しよう、待っていたまえ」

——そう言われて、自分は一つの丸テーブルに座った。暫くして、耳に女性の声が入ってきた。

「あーッ！うどんだあッ！」

そう騒ぎ立てているのは、日本の剣士——二刀流で有名な——宮本武蔵だった。江戸の「r b :時代>とき」において、小話の中で有名になった「男」の剣士。

佐々木次郎を好敵手とする、日本では1、2を争う戦士。

——それがこのカルデアにおいては女になっているのはどういう事か。自分には分からないし、分かりたくもない。

「君も食べるか？」

「いいの？頂きます！」

「ああ、持つていくから座っていたまえ」

「やったあー！」

——と、ここまでは別に（どうでも）よかった。

彼女がこちらに来るまでは。

「ね、この席座つてもいい？」

「え、あ、は？」

「失礼しまーす」

聞く気がないのに何故聞いたのだろうかこの剣士は。

「……はあ」

「溜息？ダメだよ、幸せにげちやうよ？」

「席なら、他にもあつたでしょう」

溜息の当てつけの様に嫌味をいうと、彼女は目を丸くして、キョトンとした顔で言った。

「だって、君は初めて見たから。私、色んな職員に話を聞いているの。皆、色んな国からきているのね」

楽しそうに言う彼女は、どうやらのウワサを聞いてきたワケではないようだ。

「貴方は？どこから来たの？」

「……自分、は」

「すまない、うどんが出来たぞ」

「わーッ！おうどんだ！」

すでに彼女の興味は、うどんに移ってしまった。

自分勝手が、ここに極まっている気がする。

「3つ……？」

エミヤのもつ盆には椀が3つも置かれていて、ふとした疑問が口をついた。

「私も少し休むことになってね。後しばらくはブーディカがしてくれる」

「おっ、そうなんだ。じゃ」

「頂きます」

「頂きます」

「頂きます」

この日本のうどんというのは、日本人のマスターの希望から始まった。

どういう訳か、マスターはしばらくの間、うどんだけを口にしていた。

そういうった事もあって、職員たちにとって一番なじみのある日本食だった。

「おいしー！肉うどんは最高ね！」

「口にあつたのならなによりだ」

「……そうだな」

「あ、そういえば」

と、武蔵は思いついたように言った。

「君はめつたに見ないけど、どうして？」

「部屋でカップ麺食べてるから」

「えーつもつたいたい！こんなおいしいご飯が食べられるのに！」

「君からももつと言ってくれ。彼ぐらいのものだぞ、部屋でカップ麺など……」

「カツプ麺……いいかも」

「おい」

「いやいや、思つてないよ！そんなよきそうだなくなんて……あ」

「はあ……」

一人突つ込みをする武蔵を横目に、エミヤは大きな溜息を零した。

「無理に、とも毎日こいとも言わないがね。体を労わるつもりがあるのなら、たまにはきたまえ」

「労わる必要がない人がいいですか」

「労わる必要がないからだ」

「さいですか」

エミヤは一通り食べ終わると、再び口を開いた。

「マスターも似たような事を言つて、しばらく食堂にこないことがあった」

そう聞いた武蔵は、ああ、と思ひ出したように。

「お医者様と看護師さんが言つてたわね、そういえば」

お医者様とは、キャスター・アスクレピオス。

看護師さんは、バーサーカー・ナイチンゲールを指している。

無論そこにはドクターロマンもいたのだろうが、彼らが零していたなど、露程も知ら



なかった。

「一体なにが？」

「マスターを取り巻く状況は一変した。それによる急激なストレスで一時的な拒食症になつていた様だ」

「そんなの、知らなかった……。でも、そう、よね。あの子、今まで普通の生活をしていたのだから」

急に世界が貴方の双肩に懸かっているなんて、耐えられる訳ないわ。

そう、武蔵は言った。

「しかし、マスターは生身の人間だ。君と同じく、な。……最初は点滴にする、という案もあつたらしいのだがな。イヤ、そうならなくてよかつたと思うが」

「もしかして、それで始まつたのが……」

エミヤは鷹揚に頷いた。

「そう、この“うどん”だつたわけだ」

「だから、今日もうどんを？」

まあ、な。とエミヤはチラリとこちらを見た。

「マスターは、最初こそなかなか来てくれなかつた。食べてもくれない」

「だがな、少しずつ、少しずつ来てくれるようになった。」「rb:現在>イマ」のよう

になったのは、本当に最近の事だ」

「そうだったんだ……。私、召喚されたのはこの間だったから、知らなかった」

「まあ、認識してくれればいい」

『ちよーつとゴメンよーッ!』

エミヤが話していると、急にダ・ヴィンチの声が響いてきた。

『えー1名の職員が行方不明なんだ!会議なんだけどね!名前は——』

続けて、自分の名前が垂れ流される。

「……すまない、話過ぎたな」

「ご、ごめんね!」

「いや、大丈夫……多分」

目玉は避けられないだろうな、とぼんやりと考えながら、自分は急いで廊下を走る。

この後、盛大に笑われたのは別の話。

「ちよつとやさぐれた、カルデア職員の話」#4の後書き  
とちよつとした妄想・

今回も読んでいただき有難う御座います。

え？前回からひと月経ってる？

あつホンマ……、すいませんでした。

純粹にテスト期間と風邪にドツキングされて阿鼻叫喚だったのです。

気が付いたら2月でバレンタインデー。

清少納言とか嘘やろ！となってますが、私は元気です。

今回のテーマは、カルデア最後のマスターの食生活について、です。

彼／彼女は本来、補欠要因で、ただの一般人でした。

そんな彼／彼女が緊急とはいえ、英雄として担ぎ上げられることになったわけです。

単純にそんな環境が変われば発狂するなり精神障害が出ていても可笑しくないわけ  
です。

事実、突然レムレムタイムに入ったりする精神障害が度々起こっていました。（武蔵

国とかね)

これらは魔術的な障害だったわけですが、身体的な障害があっても可笑しくないわけです。

無論それらはカルデアの（恐怖の）医療班がいる限り、許される病魔ではないわけです。

あんまり描写はされてなさそうだなーと思ったのがことの始まりだったのです。いいのかそれ？というところで作品になりました。

エミヤは確定として、あとは話に主人公を巻き込んでくれる役割が必要でした。なので武蔵守を登場させました。

良くも悪くも部外者である彼女は巻き込む役にぴったりだったのです。ドクターは出そうか考えてやめました。

彼の話はダビデに丸投げします。皆、ダビデ育てて幕間みて！

さて今回の考察枠ですが。

ホームズにしたいと思います。新宿のアーチャーの幕間もきたからね。

私、ホームズピックアップアップ（抱き合わせ）で尽く新茶に邪魔されて新茶の宝具レベル2なんですが、

彼ですらホームズの存在に懐疑的なのです。  
なので考察します。

さて、彼の不穏おぶ不穏な行動がこちら

- ・ヘルメス・トリスメギストスに触れても発狂しない
- ・六章キヤメロットにての単独顕現
- ・新宿への単独顕現

・後ろの幾何学的な奴何？ 宝具何あれ？

・いつのまにかカルデアに居座る

彼の味方だと思える描写は

- ・彼／彼女藤丸立香を助けるために死の淵を彷徨う
- ・各特異点でのサポーター
- ・プレイアブル化
- ・例の推理イベント時

さて、彼はさんざんフオーリナーじやないかと言われていますが、それは非常に在り得ます。

自分は幾何学的な例の宝具も気になりますが、一番気になるのは1・5部での彼の行動です。

かなり飛ばし気味でシナリオを読みふけりましたが、彼が動いたのは4章。例の「クトウルフ神話」特異点のみです。

それまで彼は格納庫にこもりきりで、ダ・ヴィンチちゃんに呼ばれたからとはいえ、拒否することもできませんでした。

それがわざわざ出てきてヴァイオリンを弾こうとする始末です。

結局、最終では出番をキャスターにゆずり、出てくることはありませんでした。

しかし、彼が特異点中管制塔に居ないわけがないのです。

と、考えると途中の通信で登場しても可笑しくありませんでした。

しかし、出てきたのはダ・ヴィンチちゃんとキャスターだけ。

結局、出番は無かったわけです。

では、彼はわざわざ管制塔に足を運んだワケはなんだったのか。

当時プレイしていた方々はこの特異点がクトウルフを核にしていることは、すぐに想像できたのではないのでしょうか。

そうです、ヨグソトスさんです。

事実、彼はアビゲイルを受け入れ力を与えました。

宝具演出や、アビゲイルの友人のウエイトリーちゃんから分かる事です。

何が関係あるんだよということなんですが。

これ「ヨグIIソトースを確認しようとした」と考えています。

おいおい、ホームズは管制塔にいたけど通信には出てこなかったろ！

となりますが、あくまで結果論です。

通信にでしゃばってくつちやべらなかつたの、すつごく違和感があるのです。

こういう神秘を暴き立てることは、ホームズの業なわけです。

ですが、彼は登場すらしなかつた。

では管制塔から何ができる？と考えた結果。

彼の中にいるある「神性」が、「ヨグIIソトース」の姿を確認しようとした。

その結果、普段真実を饒舌に語る口は閉じ、目だけが働いていた、と考えています。

「神性」は動画が某笑顔動画にあります。考察動画をみて、どうぞ。

では、ヨグIIソトースを確認するとなにがあるのかですが。

〽〽〽 わかんないです。〽〽〽

いや、仮に某動画の神性があっていたとして、その神性とヨグIIソトースに関係性があるのか、というとないです。

ヨグさんからすれば、全である以上、その神性でもあるといえますが、その神性からすればなんの関係もありません。

ただ、ふたつを結びつけるものが皆無かといえれば、そうではない気がします。

「知」です。

彼らは「知識」という観点において神性を獲得しています。

では、知識を得るために？ いいえ、それはありえません。

「ヴェールをはぎとる」彼は、*「全てを見る」*ことができます。

ですので、いちいち知を求める必要性がありません。見ればいいわけですから。

なんだっつたらあの幾何学宝具で真実捏造でもすればいいんです。

わざわざ確認したのはなにかしら理由があると思います。

認識に注視したからこそ、口を閉ざしていたと考えます。

なにがあるんでしょうか。

あとは、そうですね、BBがクラスカードデザインになつていることもあり、

フォーリーナーのクラスカードデザインはホームズでは？という意見があります。

そう、ですよ？ あれね？

最近実装された中国の美女のせいで私揺れてるんですが、あれホームズですよ？

どっちみち、彼が二転三転するのは間違いないでしょう。

カルデアの者に警戒されているのは、おそらく彼とダ・ヴィンチちゃんなのでしょう

から。



くつそへたくそな考察をかましましたが、私は元気です。

次回は、そうですね、クリスマスです。

カルデアのマスターのクリスマスについてです。こうご期待！

## ちょっとやさぐれた、カルデア職員の話 #5

カルデアにはそれぞれの部屋以外に談話室、というものも勿論存在している。

大抵は六〜七人が座れるような、そこそこの広さのもので、大人数のそれこそ宴でもやるような広さはない。

英雄彼らにとつては些事なのであろうが。

職員はともかくとして、英雄彼らは片付けというものを知らない輩も多い。

英雄彼らと職員の間で、ルール——要は片付けろという事なのだが——が設けられたのは最近のことだった。

そのおかげか、職員たちもちらほらと利用する事が多くなっていた。

かくいう自分は、というと。

利用する殆どを私室の代わりに使っていた。

午後の三時ほどになると大多数が食堂に集まるため、談話室が空いていることが多いから、だった。

「……ナニコレ」

適当に入った、六人掛けの談話室に恐ろしい程の洋菓子の山があった。

自分も嗜みこそするが、これほどの量は見たことがない。

つまるところ、誰かしらがこのを予約しているということである。

「つーことは、誰か来るのか。……帰ろ」

戻つてこられる前に立ち去る方がお互いのため、そう思っていたのに。

「きやあつ」

「うわつ」

自動ドアが急に開き、危うく誰かとぶつかりそうになる。

「ごめんあそばせ、職員さん。貴方もこの部屋に御用？」

「いいえ、間違えただけですよ——王妃さま」

「まあ！王妃だなんて、間違つてはいないけれど、ここではマリーと呼んで頂戴な」

フランス王妃、マリー・アントワネット。

音楽家のアマデウス・モーツァルトに求婚される程の美しさを持ち、フランスとオー  
ストリアの国交のため、幼いながら未来のルイ16世に嫁いだ。

民を愛し、国を愛し、子を愛し、人を愛した、フランスに燦然と輝く白百合の花。

最後こそ断頭台の露と消えたが、その美しさは英霊になった後も変わりはない。

「分かりました、マリー。……ええと、それではこれで」

「あー、悪いけどオタク、どけてもらえる？」

「え、あ、ああすまない、ロビンフッド」

「分かってもらえればいいんですけどねっ、と」

漸く出られると思つた矢先にこれである。

後ろにロビンフッドが立っていたのに気が付かなかつた。

ドルイド、または森の狩人。

イングリランド王、ジョン失地王の時代の義賊。ロビン・フッド。

森に住み、村の人々を愛せずとも、村の生活を愛し、守らんとした狩人。

死に瀕し、放つた矢が落ちた場所——すなわち、イチイの木に葬られた、ロビ

ン・フッドたる「誰か」。

あくまでも、ロビン・フッドたるというだけで、彼は複数いる内の一人、ということらしい。

……つまるところ、フランスの王妃がイギリスの一般人、それも義賊を供にしているという、ちんぷんかんぷんな状況になつているのである。

「ええと、職員さん。職員さんはこの後お暇かしら？」

「え、あ、ま、まあ」

元々資料やらレポートやらの整理をしたかつただけなので、暇かと云われれば暇である。

「なら、ちよつとしたものではあるけれど、お茶会に参加して頂きたいの!」

これがちよつとした、とは流石フランスの王妃である。

輝かんばんかりの瞳を向けてくるマリーから逃げる様に、ロビンフッドに視線を投げ  
る。

ロビンフッドはチラリと視線を合わせた後、目を伏せやれやれと苦笑した。

……どうやら、参加した方が吉、らしい。

「……ええ、いいですよ。丁度、休憩したいと思っていたので」

「本当? うれしいわ、すぐに用意するわね!」

「いや、自分で」

「いいの、いいの、座ってらして。私こういうことをするのは、意外と好きなの。だから、  
座っていらして!」

と、マリーは嬉々として支度を始めた。カップ、サーバー、茶漉し。

非常に手際よくこなしていく。

王妃であつたのにも関わらずこういうことをこなせるのはひとえに、彼女の性質に  
よるものだろう。

「はい、どうぞ。ああ、ロビンののはごっちなね」

「はいはい、頂きますよ」

それぞれがカップを持ち、誰からともなく。

「頂きます」

琥珀色の、よい匂いの紅茶を口に含んだ。

鮮やかな琥珀色と、それ以上のインパクトを与える華やかな香り。

少しの砂糖の甘味も、それをより際立たせていた。

「これは」

「こりゃあ、イギリスのものでも日本のもでもないですね。どこのです?」

流石イギリス人、紅茶の違いがよく分かる事分かる事。

「やっぱりお分かりになるのね!」

マリーは嬉しそうに、頬を少し赤らめた。

マリー曰く。

「アマデウスはどれも同じというし、サンソンは恐縮して来てくださらないの」

これはひどい、何が酷いとはいえないが、これはひどい。

「今日の茶葉はフランスの二ナス——生前、私が良く飲んでいた茶葉なの」

「ひえ」

危うく紅茶を零しそうになった。

フランスの場合、イギリスとは違って日常的に飲まれるのはコーヒード。

嗜好品としてゐるフランスのものは、日常的に茶を嗜む日本のものとは違い安価ではない。

それが、マリー・アントワネット——フランスの王妃が愛飲していた茶葉ともなれば、我々一般人からすれば目玉が飛び出る程の値段でも可笑しくない。

「一体どこでこの茶葉を？」

サーヴァントも利用できる共用の茶葉類にそんな大それた高級品はない。

レイシフト先の物は持ち帰る際に逐一報告される物だし、現代にレイシフト、なんて聞いたことがない。

「フランス出身の職員の方がいらつしやつて、紅茶の事でお話が合ったの！それで少しだけでも、分けて頂いたの」

フランス出身というと、ムニエルあたりだろうか。

彼ならサーヴァントに対し友好的な方だし、フランス出身ともなれば喜んで協力するだろう。

だが彼に——ムニエルにそんな趣味があっただろうか。

思い出そうと頭を捻っていると、顔が自然と険しくなっていたのかマリーが心配そうに此方を見ていた。

「御口に……合わなかったかしら？」

「い、いえ！そんなことはないですよ、非常に美味しいです」

「そう？よかった、心配していたの」

イギリスの方は、茶葉に厳しいと伺っていたから——とマリーは言った。

どうやら、自分はイギリス人だと思われていたらしい。

「あの、お聞きしてもよろしいですか」

「ええ、何かしら？」

「どうして、私を誘ったのですか」

ただの一般職員である自分は、サーヴァントと関わることは本来少ない。

やるべきは書類整理にデスクワーク。

あの事件賢王問答以来それは崩されつつあるが。

「貴方が、現在今を生きている人だから——というのは、理由にならないかしら。そ

うね、私、いつもはマスターとお茶会をしているの」

マリーはカップをソーサーにおいて、鮮やかな琥珀色の水面を見つめた。

「マスターはいつも美味しいって言ってくれるし、貴方達のお話をいつも楽しそうに話してくれるの。お祝いの話、ご飯の話、レイシフトの話——本当に沢山、話してくれるの」

微笑みながら、マリーは再び紅茶を口にした。



「私も、それはうれしいの。でも、マスターは自分の話はなさらないの。ひとつも、ひとつもよ?」——だから、貴方職員さんから聞いてみたかったの。……ご迷惑だったかしら」

彼女が、あまりにも困った顔をするものだから。

「……いいえ。私の主観——少ないものですが、それでも良ければお話ししますよ」

「本当? うれしいわ!」——あ、こちらをお食べになつて! とつても美味しいのよ!」

「クグロフですね、頂きます」

「ええ、ええ! 沢山お食べになつて!」

彼女は嬉しそうに、クグロフそを皿れに盛った。

これが「マリー・アントワネット女」が「フランス王妃女」たりえた、生来の性質なのだろう。

ろう。

たったひとりの、藤丸立香マスターを知りたい。

藤丸立香マスターに、少しでも近づきたい、という愛が、感情が、である。

「じゃ、俺はここらで……」

ロビンフッドが、カップをおいて立ち上がろうとした。

「あら、どこにお行きになるの?」

お暇だったのでは? とマリーはキラキラと変わらず輝く目で問いかけた。

ロビンフッドは、う、と小さくうめき声をあげると前とは反対に、逃げる様に視線を

こちらに投げてきた。

「……美味しいですねー」

自分は、笑顔で無視した。

「あー……スイマセン、オカワリイタダケマスカ」

「ええ、もちろん！あ、こちらも——」

結局マリーに押し負けたロビンフッドは、この不可思議なお茶会が終わるまで、王妃から逃げることは叶わなかったものであった——。